Tess of the D'Urbervilles の構造と Fatalism [1)]

——「時」の連続性を中心に——

大　榎　茂　行

（1）

Arnold Kettle は *Tess of the D'Urbervilles* が social document の要素を多く含み，過去に深く根ざした伝統的農村の崩壊の過程が19世紀に到って最終的な悲劇的段階に達したことを示すもので，これはその崩壊の象徴であると評している。[2)] 特に Durbeyfield 家の窮情は単に Johnや Joan の性格の stability の欠如によるというよりも，古代 d'Urberville 家の末裔としての歴史的過程であり，新興の d'Urberville 家の盛隆の姿と合せ考える時，更にまた土地を持たなくなった日雇労働者の苛酷な労働の姿を見る時，Tess の悲劇は単に個人の悲劇というより歴史的必然の社会的悲劇だと見るのである。

一方，J. W. Beach も指摘するように，[3)] Tess の本能的生命力とも言うべき「生」への vitality，つまり 'the inherent will to enjoy' (p. 365)[4)]

---

1) 日本ハーディ協会第16回大会（1973年10月21日）にて口頭発表したものに加筆したものである。

2) Arnold Kettle, *An Introduction to English Novel* (London: Hutchinson University Library, 1961), Vol. II, pp. 49—62.

3) Cf. Joseph W. Beach, *The Technique of Thomas Hardy* (New York: Russell & Russell, 1962), p. 192.

4) Thomas Hardy, *Tess of the D'Urbervilles* (London: Macmillan, 1963), Library Edition, p. 365. 以下本文中の引用でページ数を示したものは総てこのテキストによる。

と，それを抑制しようとする Tess の因習的モラル，'the circumstantial will against enjoyment' (p. 365) との痛ましいばかりの葛藤の姿は，そういう歴史的過程とは別に作品の劇的緊張感を作りあげ，Tess の悲劇を構成していると言える。

しかし，この両者は決して二つの別の問題ではなく，まず個人としての「生」について苦悩する姿を捕え，それを更に社会的背景としての歴史的過程とのかかわり合いの中で意義づけるように拡大して行ったところに小説家 Hardy としての面目躍如たるところがあるだろうと思うのである。つまり Tess は現在の Durbeyfield 家の娘であり，同時に d'Urberville 家としての歴史の流れを背負っているのである。したがって，例えて言えば表層構造とも言うべき Tess 個人の苦悩の宿命性を描きながら，古い農村崩壊の歴史的流れにそれを据え，つまり深層構造とも言うべき古代 d'Urberville 家の歴史性へと言及し，その現在への不可避的影響を指摘するというように両者を巧みに関連づけて描き，Tess の苦悩を一層宿命的な悲劇へと作りあげていると言える。Bert G. Hornback も Tess 自身の悲劇と第二次的歴史的テーマがあることを指摘し，'the secondary theme seems joined to the primary one of Tess's tragic destruction almost necessarily.'[1] と述べている。そこでこの小論では Tess の悲劇が如何に宿命的であり，それが d'Urberville 家の問題と如何に関連づけられて行くかを物語の構成の上から検討し，その宿命とは具体的にどういう形で表わされているかを考察してみようと思う。

(2)

Beach は Tess の人生を猫にもて遊ばれる鼠に譬えて，'...to let him go and then catch him again, leaving time for recovery between one

1) Bert G. Hornback, *The Metaphor of Chance* (Ohio: Ohio University Press, 1971), p. 111.

seizure and the next.'[1] と述べているが，捕えては苦しめ，一時的に逃がし元気を回復させて，また捕えるというこの譬えは，まさに宿命の網にかかった Tess の苦しみを言い得て妙である。そこでこの Tess の宿命の網がどのように仕掛けられているかをまず考えてみる。

Tess の苦悩は，Alec のもとへ親戚名乗りに出かけなければならなかった事情はあったが，直接的には彼に犯されたという事実から始まる。Trantridge の Alec のもとから逃げ帰る途中，追いかけて来た Alec に Tess は次のように言う。

> 'If I had gone for love o' you, if I had ever sincerely loved you, if I loved you still, I should not so loathe and hate myself for my weakness as I do now!' (p. 97)

ここで Tess は自分を犯した Alec に対しての憤りは殆どなく，自分の 'weakness'，つまり止むを得ぬ事情にあったとは言え，愛してもいない男に妥協した自分の「弱さ」に対しての嫌悪を示している。そして Alec と別れた後，偶然に出合った男の書くあの朱色の文字，'THOU, SHALT, NOT, COMMIT——.' (p. 102) を見て，その後に続く言葉，つまり「姦淫」という言葉を知った Tess は，自分の成したことが罪であったと悟り，自分を初めて 'a figure of Guilt' (p. 108) と見做す。ここに二つの重要な問題がある。一つは，Alec との関係で 'social law' (p. 108) を犯したという罪の意識が Tess に生じたことであり，もう一つは，その罪の責任を直接の相手 Alec に向けずに自分の「弱さ」として自からを苛む Tess の性癖が端的に示されていることである。これは，例えば Angel に過去を告白した後も Angel の不当さを詰るのではなく，唯々許しを乞い，'I shan't ask you to let me live with you, Angel, because I have no right to!' (p. 294) と，自分に「資格がない」と言って命じられるままに振舞うと言う。これは内省的な 'penitential mood' (p. 256) であって，この総てを自分の身に照らし

1) Beach, *op. cit.*, p. 184.

て考える内省的，求心的性癖は，Tess に与えられた大きな特徴の一つである。したがって Tess の苦悩の一生は，こういう罪の意識と内省的性癖を基本として始まる。

そこで Hardy は，Tess が出合ったその男の初めに書いた言葉として THY, DAMNATION, SLUMBERETH, NOT.' (p. 101) を示す。これは Tess の罪による破滅はこの言葉通り今後も消えることはないであろうか，というこの作品の命題をなしている。この言葉は偶然出合った男の書いた言葉として書かれているが，実は Hardy の充分な計算の上に成り立っており非常に重要な問題点の提起であって，これ以後の物語の展開は，この命題に対する展開と見做すことができる。[1)]

というのは，Hardy は次にこの Tess を惨めにしている罪の意識は，「テス自身が因習をもとに作りあげたもので実はテスの幻想の痛ましい勘違いした創造物である」と述べ，単に因習的な Tess の意識の問題であるとしている。したがって，社会通念としての掟は破らされたが自然界の如何なる掟も破ってはいない，'She had been made to break an accepted social law, but no law known to the environment ....' (p. 108) として Tess に再生の希望を与えている。そして発芽のさざめきが蕾の内に聞える春の自然との交感の中で，自然の回復力 'the recuperative power' は Tess の生きんとする本能をかき立て，それが処女性にだけ拒否されようとは思えなかったとし，Tess に人間の根源的生命力を甦らせるのである。

そこで Hardy は，先程の 'THY, DAMNATION, SLUMBERETH, NOT.' という命題に対して，

> 'The past was past ; whatever it had been it was no more at hand. Whatever its consequences, time would close over them.

1) Hornback も，最初 Hardy は 'THE, WAGES, OF, SIN, IS, DEATH' としていたが，これを前述のように変えることによって 'the whole philosophical and argumentative thesis of the novel——that the past is never dead' を示していると述べている。(*op. cit.*, p. 112)

(p. 115)

と述べ，「時」がたてば Tess の過去の総ては覆い隠されてしまうであろうという反対命題をたてる。

したがって，生きんとする本能を満たすためには罪の意識を伴なう過去を葬ることであり，そのためには過去の手の届かない場所へと移ることである，という方程式が Tess に成立する。つまり，生きようとする努力は過去から脱出しようとする努力へと変形される。このようにして Tess は，'To escape the past and all that appertained thereto was to annihilate it, and to do that she would have to get away.' (pp. 125—126) と決心し Talbothays へと移る。Talbothays における Tess は，色彩豊かな花が咲き乱れる豊饒な自然の中で 'the strength of her own vitality' (p. 161) のうずきを感じ，Angel の Tess への激情的な愛に対し，自分からも「束の間の喜び」へと浸る。だが過去という「時」は場所を変え，時の経過を経ることで断ち切れるものであろうか。Hardy はこのことを Tess の不安として次のように彼女に語らせている。

> 'And you seem to see numbers of to-morrows just all in a line, the first of them the biggest and clearest, the others getting smaller and smaller as they stand farther away; but they all seem very fierce and cruel...' (p. 159)

つまり無数の明日が一列に並んでいて，それが一日ずつ恐ろしい様相をして自分の存在を脅かすのだと Tess は漠然とながら感じる。これは過去が明日にでも現れてきて，明日はどうなるか分らないという不安であり，これは前述した Tess の求心的性癖にもよるが，実際に恐ろしい様相を帯びて続々と Tess の前に実現されてくる。

例えば牧場主の Mr. Crick がバターが出ないことから Jack Dollop にもて遊ばれた女のエピソードをする。それは他の者にはユーモラスに感じられるが，Tess にはその女に似た境遇から自分の過去の経験が甦えり，耐え難

い苦しみを感じる。'... how cruelly it touched the tender place in her experience' (p. 173) である。

また Marrian, Retty, Izz なども Angel を恋い慕っていることを知ると，Tess は自分の過去を持つ身の上が思い出され，'far less worthy of him than the homelier ones whom he ignored' (p. 189) と感じ，自分の感情を抑制しようと苦しむ。Emminster から結婚の決心をして帰った Angel は，父が Trantridge で Alec d'Urberville と不快な経験をしたことを告げるが，これもまた Tess に 'the turmoil of her own past' (p. 222) を呼び起す。Jack Dollop がある未亡人と結婚し，その女性が前に夫があったことを話さなかったと言って喧嘩が断えないという話は，Angel の結婚申込みに対して，自分の過去を話すべきかどうかという問題を Tess に迫る。だが 'appetite for joy' が強く，過去を踏み消して結婚を承諾する。

> She dismissed the past —— trod upon it and put it out, as one treads on a coal that is smouldering and dangerous. (p. 246)

しかし，このように過去を遮断したつもりで過去を告白せず結婚を承諾した Tess は，まさに「くすぶっていて危険な石炭」を踏んだようなものであって，過去の罪の意識のみならず，愛する人を偽ったという背信の苦しみ 'a treachery to him' (p. 255) が加わり，自分のモラルの問題となって一層抜き難い苦悩をもたらす。これは Angel が贈ってくれた結婚衣裳を着てみた時にさえ，母の歌ってくれた ballad をふと思い出し，この衣裳が過去を曝露しはしないかという恐れになる。そして結婚の前日，Angel と町へ出た Tess は Trantridge の男 Farmer Groby に発見されて，やはり現実に過去を逃れていないことを悟り，再び過去の亡霊の届かない場所へ逃げようとする。

> 'We shall go away, a very long distance, hundreds of miles from these parts, and such as this can never happen again, and no ghost of the past reach there.' (p. 266)

こう決心した Tess は，まず新婚の夜を過すために Wellbridge の manor house へ出かけるが，それは200年前の古代 d'Urberville 家の館で，その石壁にはめ込まれた不快な肖像画の婦人の姿には Tess の容貌を辿ることができる。Hardy は Tess が逃れようとしている過去は Tess の短かい人生経験の一つであって，それでも逃れ切れないのに，ここで Tess はもっと巨大な過去の歴史の流れの中にあることを示す。この点については後で述べるが，この過去から逃れんとすることの不可能さは，Angel と別れた後も Farmer Groby とか，Queen of Spades などの出現によって示される。だがその決定的な一撃は改宗者 Alec d'Urberville の出現である。再三再四 Tess の前に現れた彼は執拗に Tess に結婚を迫る。そして遂に Tess が 'Once victim, always victim —— that's the law!' (p. 423) と叫ぶ時，それは過去からの脱出の試みが結局は空しい徒労に過ぎなかったという断念の叫びでもあった。こうして再び Tess は Alec と一緒になり，その後でまた Angel が Tess の前に現われるという同じ pattern を繰り返しつつ過去の苦悩の根源である Alec 殺害へと辿って行く。

以上のように見ると，Tess の苦悩は本能的生命力と愛を Angel に対して激しく燃やしながら，それを抑制しようと作用するのは結局過去の罪の意識であるため，Tess の最大の努力は実は過去を如何に断絶するかということに払われ，過去から脱出への試みの一生であったと言うことができる。したがって作品全体の構成は，最初に提示した命題，「汝の滅亡は寝ねず」に対して，'past was past, ... Whatever its consequences, time would close over them' という反対命題を示したが，結局このようにこの反対命題を否定し，最初の命題を完結するように構成されていると言うことができる。そして Hardy は次のように述べている。

> ... the break of continuity between her earlier and present existence, which she had hoped for, had not, after all, taken place. Bygones would never be complete bygones till she was a bygone herself. (p. 391)

では何故過去を断絶することができないのか，何故 'the break of continuity' が起らないのかを考えてみる必要があろう。Hardy は人生の大きさはその外部的変化によるものではなく，その主観的な経験によるものだと次のように述べている。

> ... the magnitude of lives is not as to their external displacements, but as to their subjective experiences. (p. 198)

普通客観的な論理では，「時」は過去から現在へ，そして未来へと横線状に流れて行くと考えられる。したがって刻々の時の推移と共に過去は過去であり，現在とは一見何の関係もないものと考えられる。しかし主観的な意識の上では，忘却のない限り過去の経験は常に現在に重なって存在する。だから主観的経験としての過去は，我々が生きている限り人生という客観的な「時の流れ」と共に継続し，断絶は起り得ない。Tess が 'numbers of tomorrow just all in a line' と言うように，次々に明日があり，死ぬまで過去が継続し，結局 'Bygones would never be complete bygones till she was a bygone herself.' なのである。しかも Tess の主観的経験である過去は，忘れよう，逃げようとするたびに，それに纏わる事件やエピソードによって絶えず強化されるので，「時」が過去を覆い隠すどころか，むしろこの「時の連続性」によって，Tess が生きる限り絶えずつきまとうという宿命的な苦悩になって行くということができる。

この「時の連続性」という，いわば宿命的な形而上学に乗せて構成されていると思われる作品は，広い意味では Hardy の主要な作品の総てに見られるが，特に明らかになって来るのは *The Mayor of Casterbridge* であろうかと思う。酒に酔って妻子を見知らぬ水夫に売った罪の結果が18年間の歳月を経た後の市長 Henchardの前に突然現われ，Susanの死，続くHenchardの過去の告白，娘 Elizabeth-Jane が実は Newson の娘であったという発見，Lucetta, furmity woman の出現，最後には Newson の出現という形で，たたみかけるように過去が Henchard の上にのしかかり，彼を没落へ

と馳り立てて行く。この場合18年間の空間を置くことによって一見過去が断絶されたように物語を設定しながら，突然に過去の報いを現在に関係づけ，'Nature's power of continuity'[1] を示す。しかし，この *The Mayor* の場合，それが多数の人物の出入りによる plot によって示されており，過去が現在に不可避的影響を及ぼすという必然性の追求は充分に成されているとは思えない。*Tess* の場合は，最初から過去を遮断し得るか，という具体的な形で問題を提示し，Tess という人間の一生の時の流れの中で過去が現在に如何に関連づけられるかが辿られ，その宿命性が明確に追求されているということができると思う。

(3)

以上のようにこの作品の表層構造としては，実は Tess の苦悩が過去からの脱出の蹟きであり，それは「時」の連続性によって一人の人間の生きて行く限りどうすることもできない宿命的な苦悩であるということを述べてきたのであるが，この作品ではそれを更に巨大な幾世代にも及ぶ過去から現在に至る歴史の連続性に拡大し，その中で現在の人間を捕え，個人と歴史的流れとが如何に繋わり合っているかを追求し，Tess の悲劇を一層宿命的な悲劇へと作りあげていると言える。次にこの点を考察してみようと思う。

Hardy はこの作品を書く前に友人 Charles J. Hankinson と Max Gate を出て，崩壊するままに放置されている農家に目を止め，その苦しい農民の生活について語り合い，また Dorsetshire の労働者の貧しさにも驚いている。[2] また1888年9月には Woolcombe を訪れ，かつては栄えた Hardy 家の没落した様相を見て，'So we go down, down, down.'[3] と日記に書いているが，この崩壊の事実から，かつては盛隆を極めた過去の地方の名門に思いを

1) Thomas Hardy, *The Mayor of Casterbridge* (London: Macmillan, 1964), p. 20.
2) Carl J. Weber, *Hardy of Wessex* (New York: Columbia University Press, 1965), pp. 168—69.
3) F. E. Hardy, *The Life of Thomas Hardy* (London: Macmillan, 1965), p. 215.

馳せ，栄枯盛衰を辿る人間の営みを嘆じたであろうことは想像に難くない。この思いが，いわば古代 d'Urberville 家から Durbeyfield 家への推移の創造となって作品の底流をなしていると考えても無理ではないであろう。

さて，Tess の悲劇は Alec d'Urberville のもとへ親戚名乗りに行き，そこで過ちを犯した罪の意識から始まると述べたが，その Alec のもとへ行くに当っては，Tess の父親が11世紀の William the Conqueror と行を共にした騎士 Pagan d'Urberville の子孫で，17世紀の Charles 二世の時代まで名声を馳せ，各地に荘園を持っていた d'Urberville 家の今は唯一の末裔であると牧師にふと知らされたことに端を発する。Hardy はこのように馬一頭を頼りに大勢の子供を抱え，酒を唯一の楽しみに暮らす没落した Durbeyfield を11世紀にまで逆のぼる長い歴史の譜系に据えたのである。この現在の Durbeyfield と古代 d'Urberville とを結ぶものは，家に残る古い銀のスプーンと彫込みのある印形であり，また牧師が'Yes, that's the d'Urberville nose and chin' (p. 4) と John に言う遺伝的要素である。これは古代の名門が没落して今は貧しい人々の中に苗字が訛って変って残っているという歴史的事実に Hardy が立脚したものであるが，[1] これは貴族から一介の百姓，商人への衰退の流れであり，荘園制崩壊の歴史的流れを意味している。そしてこれに代わる新らしい世代が既に始まっており，作品中，金を儲けてこの南部に移ってきた Simon Stoke が滅びた家名に接木して d'Urberville として Trantridge に栄えている。Tess Durbeyfield はこうした過程の中で如何に生き得るかという課題を背負っていると言える。

このように Hardy は Durbeyfield 家を長い歴史の中に位置ずけながら，主人公 Tess に関してはその歴史の意味を全く意に介せず，あくまで現在の Tess Durbeyfield として生活させる。初めて母親から自分のこの家系を聞いても，'I'm glad of that. Will it do us any good, mother?' (p. 21) と言う程度で現実の窮乏した生活の助けになるかどうか程度の関心しか示さない。したがって弟の Abraham が名門の家柄だと知って嬉しくないかと聞

1) Weber, *op. cit.*, p. 171.

いても，'Not particular glad.' (p. 33) と特別な興味を示さず，Alec に逢った時も Alec が Durbeyfield で結構ではないかと言うのに対し，'I wish for no better, sir.' (p.48) と述べている。この Alec のもとへ来るのも Tess 自身では馬 Prince の死の補いの意味からであって古代 d'Urberville とは直接関係がないのだと考えている。このように一見過去とは無関係のように現在の Tess を扱いながら，Hardy は一方では両親を通じて古代 d'Urberville 家が Tess を Alec のもとへ動かせているというようにし，過去の歴史が否応なしに Tess に暗々裡に影響を与えて行くことを準備して行く。これは Chase の森で Alec に Tess が犯されるという事件で明確に示されてくる。

> Doubtless some of Tess d'Urberville's mailed ancestors rollicking home from a fray had dealt the same measure even more ruthlessly towards peasant girls of their time. But though to visit the sins of the fathers upon the children may be a morality good enough for divinities, it is scorned by average human nature.... (p.91)

ここで古代 d'Urberville と同様の立場に立った Alec に Tess が犯されるということは，古代 d'Urberville の田舎娘への暴行の報いであるとして，Tess が疑いもなくその直系であることを示す。そして，たとへ我々にとって軽蔑すべきことであっても，祖先の罪の報いを子孫が受けることは神の摂理であるとし，現在の苦しみは過去の罪によるものであるという因果の連続性を暗示する。

次にこの出来事によって，これまで Tess 自身には直接的な意味を持たなかった過去の歴史が否応なく意識され，Tess はこれに対して強い憎しみと反撥を抱き，d'Urberville 家の歴史を葬り，それから脱出しようとする。

> ... she almost hated them for the dance they had led her ... 'Pooh —— I have as much of mother as father in me!' she said. 'All my prettiness comes from her, and she was only a dairymaid.' (p. 132)

前述した Tess が Alec との忌わしい過去から脱出しようとする試みは，このように同時にまた Tess が 'her useless ancestors' (p. 132) と言う過去の歴史からの脱出の試みと重ねられて行く。こうして Tess は再生の息吹に燃え，歴史の目に見えない重みを避けて Talbothays に出かけるが，実は地理的には祖先の菩提のある Kingsbere に近づいて行く。つまり，時間的には過去から去ろうとしながら空間的には祖先の地に近づき，また個人的な過去の体験から脱しようとしながら実は巨大な過去の歴史に徐々に接近して行くという irony が示されている。Talbothays でAngel を愛した Tessは，彼が最も嫌悪するものは古い家柄だということを知り，自分の家系を隠そうとする。

しかし，Alec との過去がそれに纏わる人物やエピソードによって Tess に纏わると同様に，ここでも d'Urberville 家の歴史が Tess を捕えて離さない。Angelに結婚の承諾を迫られたある日，二人は馬車で駅に牛乳を送りに出掛けるが，今は亡びた古代 d'Urberville 家の館跡に出くわす。そして執こく結婚を迫る Angel に，遂に 'I —— I —— am not a Durbeyfield, but a d'Urberville —— a descendant of the same family as those ...' (p. 241) と告白するが，Hardy はここでも Tess がその過去の流れの一つであることを否定し去ることの不可能なことを示している。Hardy は更に結婚式の時に Tess の乗った馬車について神秘的な言及をし，また Wellbridge の館での肖像画への言及によって過去の歴史を一層 Tess に密着させて行く。この古い，恐らくは d'Urberville 家の family coach とも思える馬車に乗った Tess は次のように言う。

> 'Among other things I seem to have seen this carriage before, to be very well acquainted with it. It is very odd —— I must have seen it in a dream.' (p. 272)

これについて Angel は，あの家系の者は古い馬車を見たり聞いたりする伝説があるのだと説明する。この馬車を見たことがあるというエピソードは，

単に Tess の内に祖先の歴史性を改めて換起させたというだけでなく，現在の Tess に無意識の内に潜在する底流の何かが，馬車を介在して過去の祖先に反応したことを示している。こういう一種の神秘的な telepathy は，例えば *The Woodlanders* における Marty South の父親の死が老木の倒れるのと結びつけて考えられるとか，*The Well-Beloved* でも死んだ恋人の墓を夜に訪れた Jocelyn が，その死んだはずの Avice Caro の姿を娘 Ann の上に見たりするなどと，しばしば用いられる。ではこれらは何を意味するであろうか。*Tess* における場合，それは d'Urberville 家の「血」(p. 452) だと Hardy は説明し，*The Well-Beloved* では 'a racial instinct'[1] であると説明している。しかし，これはより具体的な形として Wellbridge の館の肖像画に見られるように肉体的な遺伝という形で表現され，それによって過去の歴史を Tess に明確に結びつける。つまりその肖像画に Angel は Tess の容貌を辿るのである。

> The unpleasantness of the matter was that, in addition to their effect upon Tess, her fine features were unquestionably traceable in these exaggerated forms. (p. 277)

これは Tringham 牧師が父親の容貌に 'Yes, that's the d'Urberville nose and chin ——' と祖先の跡を辿ったことと同じである。しかも，このようにただ過去と切り離せぬ存在であるばかりでなく，それが因果関係をもって現在の存在をも支配していると Hardy によって考えられているところに，Tess に課せられた宿命の網を感じざるを得ない。

Tess の父が死に，借地権が切れて土地を追出されることになった Tess 一家に対し，Hardy はそれが祖先の成したことの報いであり，運命であると次のように述べている。

> Thus the Durbeyfields, once d'Urbervilles, saw descending upon them the destiny which, no doubt, when they were among the

1) Thomas Hardy, *The Well-Beloved* (London: Macmillan, 1964), p. 76.

Olympians of the county, they had caused to descend many a time, and severely enough, upon the heads of such landless ones .... (pp. 447—48)

こうして Tess は過去の d'Urberville 家の歴史を嫌悪しながらも，その遺伝による精神的，肉体的繋がりという個人ではどうにもならない力によって，巨大な時の流れに引き込まれて行き，神の道徳に適わしい因果のリズムを繰り返させられて行く。そして遂に Kingsbere の納骨堂のある祖先のもとに辿りついた Tess は，空間的にも時間的にも過去の歴史に回帰して行く。納骨堂の中で突然 Alec に出合った後，Tess は次のように言う。

'Why am I on the wrong side of this door!' (p. 465)

あれ程最初に d'Urberville 家を嫌悪していた Tess も，今では生きている現在が 'wrong side' だと思うのである。そして，Alec との過去から Tess が懸命に逃れようと跼いたのは microcosm の世界であったのであるが，それは同時に巨大な過去の歴史を持った macrocosm の世界からの脱出の試みであったわけで，したがって Alec を殺害することによって microcosm の過去を断った Tess は同時に死を意味し，自から衰亡の運命を辿った古代 d'Urberville 家の過去の流れの中に身を没して行ったと言える。したがって，現在の Tess が過去への無関心から否応なしにそれを意識させられ，次に嫌悪し，離脱を試みるが，結局 Tess を捕えて離さないのは 200 年にも及ぶ d'Urberville 家の歴史，つまり「時の連続性」であり，'Nature's power of continuity' であると言える。そしてそれは，例えば '... her former spring-like specialities were transferred so dexterously by Time to the second figure, her child, ...'[1] のように，*The Mayor* でも，*Tess* の場合も，*The Well-Beloved* でも，遺伝という形で示されるが，本質的には「時の連続性」によるもので，それが輪回転生して現在に宿命的影響を与えてい

1) *The Mayor*, pp. 20—21.

ると述べられていると言うことができる。

以上述べたように，microcosm の「時」とmacrocosm の「時」とが重ねられて作品の表層構造となり，また深層構造となって Tess の宿命的悲劇が構成されていると思うのである。